The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明代のトゥルファーンについて
Author(s)	堀, 直
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1975, 8, p. 13-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47975
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明代のトゥルファーンについて

堀　直

はじめに

中国の明代に相当する十四～十七世紀は、中央アジア史上、現在の諸民族分布の大体の形成をみた大きな転換期である。にもかかわらず、主として史料上の制約から研究の遅れている分野でもある。本稿はこの時期トゥルファーン Turfān 地域に拠った諸勢力について若干の史実の解明を目的とする。言及すべき問題は極めて多いが、本稿では最も年代記的に信用のおける明実録（以降、実録と略称）[1]と、これもすぐれて年代記の体裁を持つターリーヒ・ラシーディー（以降、TR.と略称）[2]との対照によって、トゥルファーン諸勢力の系統問題を中心に論ずることにする。[3]

一、明初のトゥルファーン

元末の混乱を克服して、明が中央アジアの諸地域と交渉を持つに至った際、トゥルファーンには土着ウィグール Uighūr 仏教徒の三勢力が存在していた。これらの土魯番・火州・柳陳の三勢力は、十四世紀のチャガタイ汗国の東

西分裂後、東部モグーリスターン Moghūlistān に拠ったモグールウルスの汗（明史料の別失八里王）の間接統治の下にあった様である。モグールは十五世紀初頭、西北モンゴリアに興ったオイラートの圧迫により、その中心を西方イリ河谷に移した。明史料はこの勢力を「亦里把力」と呼びかえた。この時期、モグールの支配者はヴァイス Vais 汗であったが、彼は祖ヒジル・ホージャ Khizr Khōja 汗以来附庸の地位にあったトゥルファーン地域にも直接進出し、この地域の三土着勢力の支配者を放逐した。[4] 遊牧勢力によるトゥルファーン占拠である。明史料の土魯番とは地名であると同時に、その地に拠る勢力の呼称でもあるが、ここにまず最初の勢力の交代を指摘できる。

トゥルファーン支配の直接化を図ったヴァイスは、一四三二年に没し、モグーリスターンには彼の二子による汗位継承戦争が起った。次子エセン・ブカ Esen Buqa は兄ユーヌス Yūnus を西方チムール朝に走らせて、モグール汗位に即いた。明史料の「亦力把力王也先不花王」である。汗位争奪戦を伝える西方史料にはトゥルファーンが父ヴァイスの遺領としてエセン・ブカに継承されたか否かについては明記がない。が TR.86 にはエセン・ブカの領域の東端をユルドズ Yulduz としていることより、即位の混乱期にトゥルファーンはモグール汗の手からは離れたものと見てよかろう。しかし、このことは、トゥルファーンが遊牧モグールの手を離れたことを意味しない。以降のトゥルファーンには依然として遊牧勢力が拠り続けているからである。[5]

二、遊牧勢力のトゥルファーン占拠

さて明初以来の仏教的な土着勢力の消滅と遊牧モグール勢力のトゥルファーン占拠は、実は西方史料との対照によって得られた結論であった。後代の「明史」編纂者等を含めて中国側にはこの間の中央アジアの大勢が明確には伝わ

っておらず、諸史料の間に著しい混乱をもたらしてきた。まず、ここでは、「明史」の諸記述の補訂の作業を通じて、トゥルファーンに拠ったその後の諸勢力の検討を行ってみよう。

(1) 也密力火者

「明史」巻三三二、西域伝・別失八里の条には、その王統を述べて「正統十（一四四五）年、也先不花卒、也密力虎者嗣」とする。そして、成化元（一四六五）年の対西域入貢制限の提議を述べた後「自是、朝貢遂稀」と、その記述を終えている。実録では成化十一（一四七五）年六月丁酉〔四五五〕の入貢記録が最後で、以降、別失八里・亦力八里の名は記録がない。一方、「明史」巻三二九、土魯番の条では、「景泰三（一四五二）年、其酋也密力火者、遂僭稱王」とあり、ほぼ同時期に亦力八里最後の王と、土魯番で初めて王を称した二人の「也密力火者」Emil Khōja を併載し、両者の関係については一言も費していない。しかるに、これは同一人物に相違なく、ヴァイス汗以降の遊牧モグール勢力のトゥルファーン占拠を示すものと考えられる。これについて次に考察してみよう。

「明史」は亦力把里王也先不花の没年を前掲の如く、正統十年のこととしているがこれは実録の混乱に由来する誤りである。すなわち実録・正統十年十二月甲子〔三一三〕に「亦里把力王也密力虎者」として入貢以来ずっと彼が亦力把里王として記録されている。それ故、「明史」はこの正統十年を以って也先不花死す、と推断したのであろう。しかし、実録・景泰三年十二月己丑朔〔三六二〕には

哈密忠順王倒瓦答失里・頭目脱脱不花、亦力把里地面也先卜花王并妃虎都速旦・頭目捨剌、土魯番地面也密力虎者王并妃古瓦兒速檀等・頭目馬麻米兒咀等、察力失地面也密力虎者王娣打剌悶等・頭目打剌乩兒的（中略）等、一百二

十一處地面頭目俱遣使來朝貢馬

なる報道が存在する。これが先掲「明史」土魯番の条の景泰三年の也密力火者の初登場の根拠であることは疑いない。問題は、也先不花が依然として亦力把里の王として生存の伝えられている点にある。TR.88 には彼エセン・ブカの死を 866a.h.(一四六二) とするが、実録にも、天順四(一四六〇)年六月丁未〔三九一〕まで地名は欠くが也先不花王の存在は伝えられており、この景泰三年の頃は確実にモグール汗として在位していたことは誤りない。実は、也密力火者を土魯番王・察力失王とするのは実録ではこの一条のみで、以後には景泰六(一四五五)年七月丁亥〔三七一〕の「亦力把里也咩力火者領人馬、來劫哈密」の如くずっと亦力把里王として記録し続けている。

それでは実録に亦力把里に二人の王を置くのはどのような根拠があったのだろうか。TR. にはモグール汗エセン・ブカの領土の東端をユルドズとすることは前述の通りである。このユルドズの地の語源でもあるユルドズ河の下流に察力失Chālīsh があることから、実録の伝える也密力火者王の領域はチャーリシを西端としてエセン・ブカのそれと相接していたことになる。更に以前明によく通じていた亦力把力王歪思王の領域中に察力失が含まれていたことから、そして恐らく両者共にモグールという同一集団に属するという知識等から、亦力把力(モグーリスターン)の分裂を考慮できなかった明側が、この二者の領域を依然一つの勢力とみて東の明に通じ易かった也密力火者を正統亦里把里王と認めたにに違いなかろう。それ故、景泰三年十二月の如く両者共に入貢のあった場合には、より古く正統二年に明の認めた也先不花を亦里把里王となし、既に十余回の入貢を以って亦里把里王の称号を有する也密力火者を土魯番・察力失の王として、区別する必要が生じたのである。

TR. 78 は当時のモグーリスターンでは汗位を継承したもののエセン・ブカの権威は下落し、各地でアミール達の割

拠がみられたとする。この時、也先不花とならんで亦力把里王と称される也密力火者についてはムスリム側史料には相当する人物がみられない。

明側にその出自が全く伝えられていない点よりエセン・ブカ汗の系統ではなかろう[8]。ここはエリアス氏の言う独立的な地方の長の一人としておくのが穏当であろう[9]。

出自の結論は出ないまでも、彼、也密力火者の領域と系統は検討しておかねばならない。実録に彼が初めて登場するのは実は、亦力把里王となる以前、正統十年五月丙子〔三〇六〕の条でその際には「三箇城等處十五部也密火者王」となっている。同条で「三箇城」へ沙州衛の都督を使者にして下賜することがみえており、後の天順四年九月辛卯〔三九三〕の条にも遣往の記録として「哈密并三箇城・土魯番」があり、地点は決め難いが、東部天山周辺にあったと考えられる[10]。そうすると、今まで掲げた記録を総合して、三箇城・土魯番・察力失を含む亦里把里モグーリスターン東部がその領域として画かれよう。その西はエセン・ブカ領に接し、東は、略奪に人馬が行ける距離で哈密に接していたとみてよかろう。

すると、この領域、特に亦力把里を含む以上遊牧勢力であることは疑いない。又、彼自身の名前も含めて、実録に伝わる一族、頭目使臣等の漢字表記の名は、以前の土魯番の使臣らのそれと違って、ほとんどがムスリム名として推定できることから、イスラム系であったとして誤りなかろう。この遊牧イスラム勢力としての也密力火者は実録・天順三年四月丁巳〔三八五〕を最後として明史料から姿を消すが、その顚末は全く知る術がない。

(2) 阿力

「明史」土魯番の条では、続いて「成化五（一四六九）年、其酋阿力自称速壇」として、速壇阿力 Sultan ʻAlī の名を掲げる。彼は後に東進して土魯番と称される勢力で初めて明の哈密を占領することになるのだが、その出自は全く伝えられていない。この阿力を新たにモグール汗となったユーヌスに比定する見解があるが、これには検討の余地が十分ある。[11]

阿力＝ユーヌス説は二点、すなわち前掲「明史」の後段で「成化十四（一四七八）年、阿力死、其子阿黒麻嗣為速壇」とすることと、阿力の活躍期がユーヌスの在位期間に含まれることをその根拠にしている。第一点「明史」成化十四年の記事から検討してみよう。これが実録に拠ったのではないことは、成化十四年頃それに類する記事がない点より明らかである。多分、弘治十六年私撰の「平番始末」及び「興復哈密国王記」の辺軍の伝聞から採ったものであろう。[12] 少し時代は降るが万暦二年編の「殊域周咨録」巻十三には、阿黒麻は阿力の弟と記されている。「明史」が前者の説を採用したのは「殊域周咨録」以外の明代の編著がすべて前説を踏襲しているという理由だけの様である。実録では正徳三年六月庚寅〔五九五～六〕は阿力の弟速檀阿黒麻、正徳九年五月己丑〔六一三〕には阿力の子速檀阿黒麻ともするが、最も阿力の活躍時期に近い成化二三年五月丙寅〔四九四～五〕の条に「羽奴思王子鎮檀阿麻王」と全く異なる出自が示されている。最後に掲げた記事の羽奴思王が、音韻上ユーヌス汗を示すことは疑いない。するとユーヌスの子阿黒麻 Ahmad とする正確な記録も存在することになり、「明史」の阿力の子阿黒麻の記事は根拠の薄いものであることが判る。

次に第二点、阿力の活躍期とユーヌス在位の時期は果して一致するのか否か。阿力が実録に初めて登場するのは、天順八（一四六四）年九月癸酉〔四一四〕の条で、この時は具体的な地域名とは結びついておらず「鎖魯檀阿力王」と

のみ記されている。土魯番王と称されるのは成化五年十月己卯〔四三〇〕の記録からで、これが先の「明史」の根拠であろう。後、成化九年の哈密占領を最大の事跡とし、成化十五年九月甲子〔四六九〕にその死が報告されている。一方TR. 90－91にユーヌスの事跡をみると、エセン・ブカの子ドスト・ムハンマッドDost Muhammadの没後モグール汗としてアクスAqsuに入ったが、873a.h.（一四七二）年以前は二年間カルマークに追われて西方トルキスターン方面に移ったとされ、（これは成化八・九年に当る。阿力が土魯番王となった時期に両者の活躍地域は重複し得ない。）又当時、トゥルファーンにはドスト・ムハンマッドの子ケベック・スルターンKebek Sultānが居り（TR. 95）、ケベックが殺される前に、そこに入ったとは考えられない。実録・成化十五年九月甲子〔四六九～七〇〕に

速檀阿力已死、而克伯速檀又欲占據其地。火者亦速・牙蘭等尚相仇殺。

とあり、この「克伯速檀」は、彼ケベックを示しているとみてよい。そうすると、もしケベックの暗殺後にユーヌスがトゥルファーンに入ったことがあったとしても、その時期は阿力の死後であるから彼が成化九年頃に土魯番王と称せられる可能性は全くないことになる。

これで阿力＝ユーヌス説の二つの根拠はなくなったと考えるが、積極的な反論の為の材料もある。前出の羽奴思王については三度の入貢記録が実録にある。彼の初出は、実に阿力の死の確認された成化十五年より遅れること三年の成化十八年二月辛亥〔四七五〕の「陝西阿迷等處羽奴思王」である。成化二〇年四月壬戌〔脱〕の条には「火失阿兒等處羽奴思王」とある。火失阿兒はカシュガルで問題はないが、「陝西阿迷」とは何処か。陝西は迤西の、阿迷は阿速の誤記であると思う。[13] 阿速も、阿蘭と同義のAorsiではなく、モグール汗の首都とも言えるアクスを示していると考えられる。アクスを阿速の類の字で表現するのは辺政考、巻八の「阿速城」[14]、元代の海都の攻撃をうけた「阿思」の例

がある。[15] 又、高昌館来文中に「阿速」の「阿把把吉兒」の遣使がみられる。[16] 彼は音韻上のみの理由ではあるがアフマド汗の没後、アクスを領有したミルザ・アバー・バクル Mirza Abā Bakr に比定でき、ここでも阿速＝アクスが認められよう。すると、成化末に於いてもユーヌスは、アクス・カシュガル王と称せられていたのである。

更に、阿力の親族関係が、TR. にみる限りユーヌスのそれと合致しない点も同一人物説を支持しない。

以上、阿力がユーヌスであり得ないことを明らかにした。次に問題とすべきは、ユーヌス以外に誰か、阿力に相当する人物が西方史料に残っていないかという点である。

アフマド汗に先行してトゥルファーン占拠をなした点から、ケベック・スルターンを想定する説もある。[17] しかし、前掲実録にみる限り、ケベック（克伯）は阿力と別人として明記されているし、TR. 90（注8参照）には彼の父は二四才で死んだとするから東走時には多分幼児の筈であり、同意し難い。単に名称の一致からであるが、TR. のスルターン・アリー・ジャラース Sultān ʻAlī Jarās が考えられよう。TR. 121 には彼はエセン・ブカから離れて独立して行動しており、後にアフマド汗に殺されたと伝えるのみである。が、彼がその名前通りジャラース族を率いていたとすれば、この集団はカルマークに走ったとされているから（TR. 79）、東北部に移って行動していたとみてよかろう。TR. では彼と、東走してトゥルファーン入りをしたケベックとの関係については一言も述べられていないが、トゥルファーンに走った当時は幼児であったケベックを擁立した勢力の一つとして、明史料の土魯番王阿力を加えてもよいであろう。先掲実録・成化十五年九月甲子〔四六九～七〇〕の阿力の死後も、トゥルファーンに居った克伯速檀は、頼るべき土魯番勢力の阿力を失った姿だと考えられよう。実録に三、四年の記録の空白の後に、突然阿力の死が伝えられるのは、TR. に言うアフマドとの戦いでの戦死であろう。明史料には残らぬが、第一次の阿黒麻の東進察力失付近

での戦斗が想定されるからである。[18]

詳細は明らかにし得ないながら、阿力は事跡及び速魯檀（スルターン）の称号等からイスラム的遊牧勢力であり、モグール汗のユーヌスとはケベック・スルターンを介して、むしろ敵対勢力であったとして大過ないと考える。

(3) 兀也思

さて「明史」等では阿力の後、土魯番に拠ったのが阿黒麻の如くに記しているが、実はこれも正しくない。実録には成化十六年十一月戊戌〔四七一〕の「兀隆各」と成化十七年十一月庚寅〔四七四〕初出の「速魯檀兀也思王」がみえる。前者は、一度きりで、「王」たるか否かも定かでない。兀也思王の方は成化二三年十一月甲子〔五〇〇〕まで名称がみえる。TR. 95には、トゥルファーンに居ったケベック・スルターンは部下の裏切りにあって殺され、その首は877a.h.（一四七二～三）年以降三たびモグーリスターンにもどっていたユーヌスのもとへ送られたとし、又、ユーヌス汗はこの行為を怒って暗殺者達への報復を命じたと伝えている。阿力の死後ケベックの暗殺を伝えたものであり、明史料のスルターン兀也思王とはその暗殺者達に属するのではあるまいか。実録には同年五月丙寅〔四九四〕に「羽奴思王子阿麻王、復侵奪察力失等四城」とあり、再び東進してくるアフマド汗の動向を知り得る。奪った相手は多分、このスルターン兀也思王であろう。阿力没後の成化十八年四月、哈密の旧勢力が哈密城の回復に成功するのも、東西から挟撃にあっていた土魯番の弱化した姿ともみられる。彼、兀也思王は、TR.には何の記録もなく、明史料によっても出自等一切不明であるが、速檀の称号より、イスラム系の勢力であった点は明らかである。TR.に伝えるアフマドの事跡にトゥルファーン・哈密占拠等がみられないのは、この地域に拠った勢力が、汗から独立したモグールの一

支やカルマーク及びそれと密接に結びついていた勢力の故であろう。つまり、アフマドの反モグール汗勢力やカルマーク討伐の記録の内に含まれていると解釈し得るからである。

以上にみた、トゥルファーンに拠った也密力火者・阿力・兀也思のうち特に前二者は、イスラム的な遊牧勢力であったことが明らかである。しかしこれらは皆、モグール汗と結びついたものではなく、独立に、あるいは汗に対抗して東方拓境を行ったモグールの一支であり、これらを東進平定することでアフマド汗以降のチャガタイ系勢力のトゥルファーン占拠が行われたと小括できよう。

三、チャガタイ系土魯番

(1) 阿黒麻・満速兒

阿黒麻と明史料に記される彼アフマドこそモグール汗としてトゥルファーンを領有確保した事跡の確実な人物である。遊牧的ムスリムである点は以前の諸勢力と同じながら、ここにトゥルファーンはヴァイス汗以後久しくして再びチャガタイ末裔を戴くモグーリスタン汗国の領域に組みこまれるに至ったのである。明側からみたアフマドはあたかもトゥルファーンにその本拠を置いたかの如くであるが、勿論これは正しくない。父ユーヌス汗のモグーリスターン在住中の彼アフマドの動向は不明な点が多いが、父が西方タシケント方面に去った一四八五年以降、父とは離れて東帰し、モグーリスターンに独立的な勢力の確立を行い始めているようである。彼はモグーリスターンに於ける自己の地位の強化に一〇年間奔走したとされているが(TR.120−21)これは正しく成化二三年の察力失侵入より、ハミ侵攻の絶える弘治九年までに相当する。

彼はモグーリスターンでの勢力確立後、タリム盆地西南部のオアシス地帯に盤踞していたドグラトのアバー・バクルに鉾先をむけたようである(TR. 124)。その結着をみぬまま、新たに西方マヴァラアンナフルに南下してきたウズベクに苦しむ兄マフムード Mahmūd の救援に赴くのだが、結局これに敗れてアクスに引退し病没する。909a.h.(一五〇三～四)年のことと伝わっている(TR. 123)。

彼はアクスを本拠としたモグール汗であり、滞留はしても決してトゥルファーンを本拠とした勢力ではなかった。彼の遺領として伝えられているのは「キターイの端からカシュガルの境界に至るトゥルファーン・チャーリシ・クチャ Kucha・アクス・ウシュ Ush の諸地域」であった(TR. 162)。トゥルファーンはその東端の一拠点にしかすぎなかったのである。

彼のこの遺領を継承して汗位に即いたのが長子スルターン・マンスール Sultān Mansūr である。彼の即位の際、兄弟間の汗位継承戦争がおこっているが、明側にも事情はほぼ正確に伝わっており、「明史」は諸史料の記述を、「弘治十七(一五〇四)年、阿黒麻死、諸子争立相仇殺、已而長子満速兒嗣為速壇」と纒めている。

彼マンスールはモグール汗位は得たものの極めて困難な立場にあった。すなわち、西北方には父を敗り、伯父マフムード汗の旧領に勢力を確立したウズベクと新興カザークやキルギスの独立がみられ、西南方には祖父ユーヌス以来の宿敵ミルザ・アバー・バクルの勢力が存在していた。父の討伐によって拓かれていた東方カルマーク方面のみが、残されていたといえよう。前者西方の天山南北両麓にせまる二つの勢力に対してマンスールは常に守勢であり、その圧力は彼に本拠地の東遷を余儀なくさせた。そして、この様な背景の下のマンスールこそトゥルファーンに居し、そこを自らの本拠地とした最初のモグール汗であった[19]。

では、マンスールの東遷の時期を検討してみよう。彼が即位の当初はアクスに本拠を置いていた点はTR.123に明確に述べられている。しかし、彼の即位後、間もなく父アフマド以来の権臣ジャバール・ベルディJabār Berdiの手引きによってミルザ・アバー・バクルがアクスを占領している。それ以後、彼のアクス奪還は伝えられておらず、アバー・バクルを滅してカシュガル汗国をたてたサイードSa'īdがその地を継承しているようである（TR.126, 343）。これらから、マンスールは歴代モグール汗のタリム盆地内の本拠地アクスを、即位（一五〇四年）まもない時期に、失ったとみてよかろう。又、アクスの東隣のクチャ（クサーンKusān）も一五一四年にはマンスールから分離した弟ババジュク・スルターンBabajuq Sulṭānの領地となっており（TR.126）、更に東隣りのチャリーシ以東のみがマンスールの手に残ったようである。

それでは天山山脈を隔てたモグーリスターンの遊牧本地はどうであったのか。ここでもまず、ミルザ・アバー・バクルの北進があり、914a.h.（一五〇八～九）年頃（TR.88）より、すべてのモグールはチャーリシ・トゥルファーンに脱出したと伝えられている（TR.319—20）。又、916a.h.（一五一〇）年頃よりは、キルギスの独立がモグーリスターンで顕著となり、モグール達を駆逐したらしい（TR.367）。同じ時期の正徳八（一五一三）年の報道として「迤西紅帽兒夷虜」「五、六萬」が土魯番の背後にあると伝わっている[20]。紅帽兒夷虜はキジル・バシの意訳であり、マヴァラアンナフルに侵入したサファービィ朝ペルシャ軍に相違ない[21]。イスマーイルIsmā'īl率いる彼らがモグーリスターンにまで来ったとは考えられないが、ウズベク・カザークの東進のインパクトの一つには考えられよう。いずれにせよ、一五一〇年代には、モグーリスターンの遊牧本拠も、彼マンスールの手から離れていったとみて大過ない。この地を奪還する動きは後にもっぱらカシュガル汗系モグールの手で行なわれている。そして、このモグーリスターンの放棄

は、マンスールが、もはやモグール汗としての内実を失ったことを意味しており、むしろ、トゥルファーン汗と称すべき存在になってしまうことを結果した。

マンスールの明との接触はキターイへの聖戦という形でTR.には述べられており、929a.h.(一五一五)年以降二十年間のうち数度行なわれ、常にmansūr (victorious)で帰還したとしている(TR.127)。甘粛辺境に登場するマンスールの動向はかえって明史料に詳らかである。が、明との哈密・嘉峪関等をめぐる抗争の経緯は別の機会に譲って、ここではチャガタイ系モグール勢力の東遷という側面のみについて若干の言及を加えることにしておく。

まずアフマドの東進は弘治元年の哈密占領から、同九年までの約十年間に亘り、その範囲もほぼ哈密にとどまっている。が、マンスールのそれは正徳八年より嘉靖七年に至る十七、八年間、哈密を拠点として明の西北諸衛はもちろん甘粛の諸州にまで及んでいる。

第一の時期、アフマドは哈密の占拠を二度行っている。最初の占領については材料が乏しく、叛徒討伐の延長という程度の推察しかできない。二度目の哈密占拠は、哈密の王統がチャガタイ系モンゴルから傍系のウィグル貴族に移ったことに反対するのを口実にしている[22]。これは複雑な民族構成を有する哈密内部の抗争対立に介入してその地の併呑を図らんとしたものである。しかし、その根底的な目的は、やはり明の西方に開かれた唯一の窓口である哈密を握ることによって東西交易上の経済的利益を得ることにあったとみてよかろう。すなわち、従来明によって封ぜられた哈密王家が行っていた西域貢使の入朝事務の肩がわりを乞うた言葉にその真意を求めてしかるべきである[23]。

それ故、アフマドの哈密占拠も入貢制限等の処置でもって明が対抗すれば、哈密の返還を二度も実行する程、対明交易の比重の高い行為であった。逆にアフマドの領域等から大勢をみれば、哈密を占領地として取引き材料にできる

程余裕もあったと言えよう。

しかし、正徳九（一五一四）年のマンスールの哈密占領は、前述の強いられた東遷の結果としての行為であり、領域としての哈密の地位が上昇していたと見てよい。[24] それ故、ついに哈密は返還されることはなかった。と同時に、明の対抗策である入貢制限を撤廃させる為の武力侵入は哈密占拠を前提とした政策の如くである。

明が本土防衛力の低下から哈密を含む西北諸衛維持の意図を放棄し、規定を破り無制限な朝貢貿易を許す、つまり本土の貿易関門嘉峪関の壁を実質的に突破するまで、マンスール率いる土魯番の東進攻撃は続けられるのである。

今一つ、イスラム教東漸の最先端という側面については、若干の断片的な史実の他には明の領域へのイスラム化の働きかけをみることができない。モグール内部については後述するが、占領地はともかく、聖戦の対象地河西諸州においてはマンスールの時期には、さほど深い影響は与えなかったようである。

(2) 遊牧ムスリムとしての土魯番

明初の一時期を除いて、土魯番と、明史料の記す勢力が、トゥルファーンを領有する遊牧勢力を示したことは既述の通りである。遊牧モグールが民族・系統を異にする多くの集団の集合体であったことは一般の遊牧勢力と同様であった。トゥルファーン方面に移った後のモグールも、当初は間野氏の検出された諸集団の連合体であったと思われる。[25] TR.その他にも東遷後のこれらの集団については述べる所が少ない。領域上の推察としてはトゥルファーン地域のウィグール、ハミ北方のメクリット集団の本拠地を領有するに至っているから、これら両集団の比重の増大が考えられよう。又、オイラート系の哈喇灰・小列禿や、トルコ系の散里畏兀兒の加入も明史料から推断できるし、さらには漢回

とも結びついてくるようである。最も大きな変化は明史料の瓦剌、TR.等のカルマークと称するオイラート勢力との結びつきであろう。[26]

これらの集合体たる土魯番は、その結集理念の有無によって四、五千の勢力から二万の兵力を擁して遠征を行うまでに拡大したり、諸集団の独立化、汗諸子の分立によって領域の細分化をみたり、不断の伸縮をみることになる。これらの個々の事象の具体的な検討は他日を期すとして、アフマド、マンスールの時期にそのモグール集団内で重要な役割を演じた二人の人物の事跡を追うことによって、東遷モグール勢力の性格について考察してみよう。

一人は、アフマド、マンスール二代の汗のウルス・ベキであったアミール・ジャバール・ベルディである。汗に次ぎ、諸集団の長アミールの頂点に立つウルス・ベキの職は、モグーリスターンではドグラト集団の出身者にのみ与えられたが、彼ジャバール・ベルディもドグラトの出であった(TR.336)。TR.には、彼がドグラトに属するとは言うものの明確な出自を示していない。そしてこのことはアフマドの権力自体が非都市的な遊牧勢力に依拠していた点と結びつけて考えられる。アフマドのモグーリスターンでの権力樹立は父ユーヌスを中心とする都市居住派勢力に反対する部分の擁立によってなされており、ウルス・ベキたる以上、彼ジャバール・ベルディもドグラトを率いてこれに参加したのであろう。TR.には彼の領域についても述べるところがないが、ドグラトの都市派の居ったアルティ・シャフルでないことは明らかで、多分、モグーリスターン東部に拠っていたものと思われる。アフマドの没後、マンスールをしてジャバール・ベルディありて我が玉座の安全なしと言わせしめた程(TR.337)、彼は前掲アフマド汗の領域内に勢力を有していた。かつ又、彼は妹をアフマド汗の妻としており、マンスールにとっては義伯父の関係にあった(TR.124)。マンスールの猜疑に、彼はミルザ・アバー・バクルと結んだ叛乱でもって答えた。その為にマンスールが

アクスを失った点は先述した通りである。彼は後にマンスールと和解して東に移ったが、彼の再加入によってマンスールの力は大いに強化されたと言う(TR. 339)。時期は明らかにされていないが、彼は中国への聖戦中に戦死したとされており、あるいは明史料の伝える牙木蘭が比定されるかもしれない。[27] ドグラトにして、二代の汗の姻族でウルス・ベキたる彼こそ、遊牧モグールの東遷勢力を支えたアミールの代表人物と言えよう。そして、ここに汗権力を支え、かつ、それを脅かす大きな勢力の姿をみることができる。

今一人は、タジ・ウッデーン Taj ud-Dīn である。彼はクサーンの住人で、ナクシバンディ派の神秘主義教団の長老であり、かつ同時に商業・農業にも手を染めていた富豪であった(TR. 127)。彼はトゥルファーンのアフマドに招かれてその地に赴き、以降二代の汗に従って宗教活動を行い、モグールのイスラム改宗に尽力し、後、中国での聖戦中に戦死したとされている(TR. 127)。明史料に、嘉靖三年粛州にて戦没したとする他只丁が彼に相当する。定住地域出身のムスリムとして、遊牧モグールの社会で活躍し、チャガタイ系土魯番成立の最大の歴史的意義、地域のイスラム化の完成の中心人物の一人として彼を評価することができよう。

さて、嘉靖七年以降、土魯番の積極的な対明武力攻勢はみられなくなる。明の懐柔策、貿易制限の撤廃や、モンゴル勢力の西進等が考えられるが、最大の原因はモグール勢力の分裂自壊作用とみられる。遊牧勢力の興亡の歴史において因であり果たり得る構成諸集団の解体分立も、現段階では遊牧土魯番に於けるそれについては論ずるに足る十分の材料がない。ただ表面的な現象としての王統の分立として述べるのが許されているだけである。

(3) 沙・馬速・馬黒麻

マンスールは晩年、領地トゥルファーンとチャーリシを、長子シャー・スルターンShāh Sultān に譲って引退したとTR. 129は伝える。辺政考、巻十一には、より詳しく

是年（嘉靖八＝一五二九年）、土魯番酋速壇満速兒以弟把巴察於曲先城、長子沙速壇於察力失、次子馬黒麻據哈密、各住守。

と述べる。TR. 129にはマンスールの死を950a. h.（一五四三）年のこととし、シャー・スルターン、ムハンマド・スルターンの二子の存在のみを伝えるが、すでに擱筆間際のことで精密なものではなかろう。辺政考、巻五には、嘉靖二二（一五四三）年の項に、

三月、速壇満速兒死。有弟把巴察、領兵五百到察力失、與沙速壇争奪地方。沙速壇回土魯番、差人哈密、調馬黒麻速壇、與之併力。把巴察同子虎寫因速壇、遂領兵至土魯番。沙速壇・馬黒麻速壇俱走他倫。被獲説誓、沙速壇将察力失地方與把巴察并其子、回曲先城。

と詳しいマンスール死後の一族間の争いをみることができる。TR. 126にクサーン（曲先）を領有しているとするババジュク・スルターンがチャーリシを奪ったことはこの明側の史料によって確認できるが、その後、彼がそこを保持し続けていたか明らかでない。

実録、辺政考等には、その後かろうじて土魯番王となった沙速壇を伝えるが、正統意識の漢文史料からも、汗位継承戦争ではない、領域争奪戦としての様相を呈してきているのがうかがわれる。

シャー・スルターンがトゥルファーンに拠るようになった後、今度は東部で弟のムハンマッドと争いが始まっている。実録・嘉靖二四年七月丙子〔七一四〕には、兄弟抗争の開始を伝え、同・嘉靖二五年正月丙戌〔七一五～六〕に

より詳しい事情が報ぜられている。つまり、父の後を襲って本国土魯番の主となった兄の沙に対抗して、弟の馬黒麻は哈密に拠り、「結婚瓦剌以為援、潜種沙州田以為資、意在西抗」という状態であった。ここにチャーリシを叔父の一統に奪われ、更に兄弟で東西に分裂したマンスール没後の土魯番をみることができる。シャー・スルターンの子脱列速檀が東進して哈密を占拠したことが実録・嘉靖三八年十一月己卯〔七二四〕に見え、依然として足弟あげての抗争は続いたらしい。実録に沙速檀を「土魯番王」、馬黒麻速檀を「土魯番回夷」と呼んでいるのは明の正統意識に基くものであろう。嘉靖四五年三月壬寅〔七二五～六〕の実録にはシャー・スルターンの弟、速檀馬速 Sulṭān Ma'sūd(?) が新たに土魯番王となったと記している。兄シャー・スルターンが北虜部落との戦いで死んだ結果[28]「擁衆嗣立」と報告している。この速檀馬速の名は西方史料には見出し得ない。

実録・隆慶四年九月甲戌〔七二九〕では

先是、土魯番馬黒麻新立為王、遣使謝恩求貢、而其兄弟瑣非速檀・虎来失速檀・阿卜撤亦速檀、亦各遣使

とあり、沙州まで後退していたマンスールの次子ムハンマッドが遂に西進して土魯番王になったかの如くである。しかし、ここに問題が生じてくる。新立土魯番王馬黒麻の兄弟として伝えられる三人の速檀の名が、西部カシュガル汗家のアブド・アルラシード 'Abd al-Rashīd 汗の諸子のうちの三人に全く一致する点がそれである。すなわち瑣非速檀は五男スーフィー・スルターン Sūfī Sulṭān に、虎来失速檀は九男クライシ・スルターン Quraish Sulṭān に、阿卜撤亦速檀は八男アブー・サイード・スルターン 'Abū Sa'īd Sulṭān に全て比定が可能である。[29]

ここで、アフマド汗の三男、マンスールの弟、サイードがミルザ・アバー・バクルを倒してその領域に樹立したカシュガル汗家を概観しておく必要がある。

四、カシュガル汗家の東進

サイードは一五三三年に没し、カシュガル汗位はその長男アブド・アルラシードに伝わった。彼は、伯父トゥルファーンのマンスールと二度アクスをめぐって争って、いずれもマンスールを撃退している。[30] 彼は一五六六年頃、没し、十二、三人の子を遺したと伝えられている。[31] 彼らはカシュガル汗国の領域内のタリム盆地の諸オアシスに割拠していた様である。そのうちの三人が前述の諸速檀である。ラシード汗の後をついだアブド・アルケリーム 'Abd al-Kerīm 汗の没後（一五九四年頃）、カシュガル汗位についたのは彼の弟ムハンマッド Muḥammad 汗で、一六一〇年頃まで在位したとある。[32] そしてこのムハンマッド汗は先出三速檀と兄弟であった。実は、先掲実録の「兄弟」の一語が正しいのなら、新たに土魯番王となったのは沙州に拠っていたマンスールの子ムハンマッドではなく、カシュガル汗家のサイードの孫ムハンマッドでなくてはならぬが、カシュガル汗国側の史料ではその可能性は薄い。ここは、「同族兄弟」とでも解しておく他はない。[33]

さて、前掲実録の一五七〇年にはまだ、カシュガルはアブド・アルケリーム汗の在位中であるが、ムハンマッドとその三兄弟の動向をみてみよう。当時クライシュ・スルターンはホータンに居しており、[34] スーフィ・スルターンはカシュガルのハーキムでその地に居り、[35] アブ・サイード・スルターンもカシュガルに居り、[36] ムハンマッドはアクスのハーキムであったようである。[37] 断片的ではあるが、いずれも明へ、同族トゥルファーンを通じて入貢したものであろう。

一史料には「シャー汗をカルマークが殺した後、チャーリシ、トゥルファーンには汗が居なくなった」としている。[38] この機会をとらえてその地によったのは、前出クライシュ・スルターンの子ムハンマッド・フダバンド Muḥammad

Khudābandah 汗である。[39] 実録万暦十一〔一五八三〕年十月戊午〔七三七〕に「土魯番速檀馬黒麻虎答遍迭新立為王」と伝えるその人である。彼はカザークの英主タウケ・ハーン Tayke Khān の支援をうけていたとされており、[40] カザークが東方トゥルファーンまで進出してきたのを見ることができる。[41]

ここに、一四八三年頃同じチャガタイ系であるけれどもカシュガル汗家への土魯番の王統の遷移をみることができる。彼フダバンド汗は、後、義父であるカシュガル汗のムハンマッド汗の遣わしたアブド・アルラーヒム ʿAbd al-Raḥīm の討伐をうけることになる。フダバンドはその地を十二年間支配したと伝えられているから、[42] 万暦十一年より算して一五九五年頃の事件とみられる。この際アブド・アルラーヒム側にはカザークが付き、フダバンドはカルマークに助勢を求めており、[43] 非遊牧化しつつあるチャガタイ末流と、新興の遊牧勢力ジュンガル、カザークとの力の変化が明確にみてとれよう。結局、カルマークの裏切りによってフダバンドは捕えられヤルカンドに送られた。[44] そして、以来このアブド・アルラーヒムの子孫がこの地を占拠することになる。欧人にして久しぶりにこの地を通過したベネディクト・ゴエスの伝えるチャーリシからコムルまでを治める、カシュガル汗の庶子とは、[45] ムハンマッド汗の庶弟の誤りでアブド・アルラーヒムのことであろう。[46] 実録には天啓元（一六二一）年八月甲申〔七五三〕に土魯番王阿都剌因とみえている。彼は後にカシュガル汗ムハンマッド、その子シュジャー・アディン・アフマド Shujāʿ al-dīn Aḥmad と、更にはその子アパク Apaq 汗等の歴代カシュガル汗と対立しつづける。所謂カシュガル東部王家である。彼は 1042a.h.〔一六三二〕年頃に没し、九子があったと言う。[47] トゥルファーンを継いだのは次子アブー・アルムハンマッド Abu al-Muḥammad である。[48] 彼が中国史料にみられるのは既に清の時代で順治三年に「土魯番蘇勒檀阿布勒阿哈默特阿済汗」としてである。[49] 後に、彼は西進し、ムハンマッド系のカシュガル西部王家を放逐するのであるが、すで

に、カシュガール汗国史の領域に属し、明代のトゥルファーンと題した本稿の任の外にある。

おわりに

以上、明代土魯番と称された勢力を、王統を中心に論じてきた。明初より宣徳年間までが、農耕、仏教的土着政権であり、ヴァイス汗の侵入によって断絶する。以降、成化末年まではイスラム系の遊牧モグールの分立的な諸勢力が次々にここに拠った。弘治年間以後は、モグール汗の支配に入り、その東遷によって汗国の本拠地となった。十六世紀末、同じチャガタイ系のカシュガル汗家に王統が移りその領域の一部となった。

ささやかな結論であるが、対蒙古勢力との関係、地域のイスラム化、遊牧民の定着化の社会史的考察等の残された問題が、今後の道である。

注

(1) 本稿で引用する実録は、京都大学文学部内陸アジア研究所刊「明代西域史料—明実録抄—」京都、一九七四年、に拠り、〔〕としてその掲載頁を示す。

(2) TR.の引用は左記の英訳書に拠り、TR.123の如くに引用頁を示す。
E. P. Ross & N. Elias, *A History of the Moghuls of Central Asia, The Tarkh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar*, London, 1895.

(3) 明代のトゥルファーン史を対象とした研究には馮家昇等編著「維吾尔族史料簡編（上）」北京、一九五八年、の第七～九章。間野英二「十五世紀初頭のモグーリスターン—ヴァイス汗の時代—」（東洋史研究二三の一）。その王統を考察したものにElias, TR.の序論がある。

(4) 間野氏、前掲論文、九～十二頁

(5) 宣徳年間まで、多くの入貢記録は「土魯番城」とするが、以降は「土魯番地面」の類の表現が多くなり、決して城と称せられることがない。一つの証しにもなろう。

(6) 実録・正統四年二月丙辰〔二四一〕

(7) 実録・正統二年四月丁卯〔二三二〜三〕に、ヴァイスを継いだ也先不花への勅諭がみえる。

(8) 注7に引いた実録には、TR.には見えない也先不花の弟の存在が伝えられている。名前が不明であり、比定に躊躇する。イセン・ブカの一子はドスト・ムハンマッドであるが、十七才で一四六二年に即位し、七年間在位し、一四六九年二四才(TR.90には四十才とするが、本田実信氏将来の大英博物館蔵Or.157のペルシャ語写本62a.に拠って訂正できた。間野英二氏の御教示に感謝する。)で没したと伝えられており(TR.88〜90)、時期的、年齢的に無理があり、彼に比定するのも困難である。

(9) Elias, TR. Introduction, p.106.

(10) 三箇城を意訳と考えれば、スタイン氏将来のウィグル語仏典の所謂「至正十年書写仏典」(B.M.Or.8212(109) Ch.XIX 003.) 中に見える üč lükčük balıq に相当するのかもしれない(本文書については、羽田亨「回鶻訳本安慧の倶舎論実義疏」〔—羽田博士史学論文集、言語・宗教篇—京都、一九五八年〕一六二〜六四頁。小田寿典「ウィグル文 文殊師利成就法の断片一葉」〔東洋史研究三三の一〕九七〜九八頁)。所在はやはり不明である。

(11) 最近では、M. Rossabi, Ming China and Turfan, 1406-5517, (Central Asiatic Journal, vol. XVI, Pt.3, 1972) p.215。佐口透「トルキスタンの諸ハン国」(岩波講座世界歴史、第十三巻、東京、一九七一年、所収)五一頁には、この説を「再考の余地がある」とされている。

(12) 両書(いずれも「紀録彙編」所収)共に、「成化十四年、鎖檀阿力故、其子阿黒麻云々」とある。

(13) 迤西とすべきを陝西と誤った実録の例として、正徳六年正月乙亥〔六〇七〕のタシケントが、同じく迷と速の例を正統十三年四日甲申〔三三九〕の亦速力火者(前出の也密力火者を示す)にみることができる。

(14) 実録・正徳十一年五月庚寅〔六一九〕の「阿速城」も同様。ただし、明代一般に阿速と言えば(「明史」巻三三二)Aorsi を示した。

E. Bretschneider, *Mediaeval Researches, from Eastern Asiatic Sources*, vol. II. London, 1937. pp. 84-90

(15) 元史、巻十八、本紀・至元三一年十二月戊戌の条。清の欽定西域図志、巻三には、元代「阿克蘇舊音阿思」とする。

(16) L. Ligeti, Documents sino-ouigours du Bureau des Traducteurs, (Acta Orient. Hung. tom. XXI, Budapest, 1968) p. 53

(17) Bretschneider, op. cit., p. 200

(18) 実録・成化十一年二月丙申〔四五一〕に、速檀阿力治下の土魯番より来帰する者が増加している事実が伝えられ、その地域の変動が推察できる。又、後に掲げる阿（黒）麻の察力失攻撃が「復」のこととしている点も、先行した時代、成化一〇年代のアフマドの東進を推察させる。

(19) 明史料は勿論のこと、TR. 以外の西方同時期の史料も等しく彼をトゥルファーン地域の支配者として述べている。Haidar Razi (H. Yule & H. Cordier, *Cathay and the Way Thither*, London, 1913-16 vol. 4, p. 234)。Babur (A. S. Berveridge, *Babur-Nāma—memoirs of Bābur-*, London, 1922 p. 158.)

(20) 辺政考、巻十一、

(21) 羽田明「明末清初の東トルキスタン—その回教史的考察」（東洋史研究七の五）十～十一頁。

(22) TR. 214. note. Berveridge, op. cit., pp. 630-31, note 5.
王享記（「名山蔵」所収）巻五に、阿黒麻の言葉として「（哈密忠順王）罕愼畏兀兒種也、非脱脱貴族、安得王、王哈密當我」とある。

(23) 殊域周咨録、巻十三に阿黒麻の言葉として「立我為王居哈密、領西域職貢」とある。

(24) 遊牧勢力自体にとってトゥルファーン占拠はそれほど大きな意味はもたない。トゥルファーンに大きな遊牧勢力が依拠し得い点、安部健夫「西ウィグル國史の研究」京都、一九五五年、第五章、三二四～五頁、に論じられており、ハミ北方バルクルの地が注目されよう。

(25) 間野英二「モグーリスターン遊牧社会史序説」（西南アジア研究十七）

(26) 也先没後の分裂期にあったオイラート諸集団とチャガタイ土魯番の関係は種々の形で伝えられている。抗争・対立（TR. 121, 125. 実録・弘治六年四月己亥〔五三六〕、正徳十二年四月丙辰〔六二五〕）・通婚（実録・嘉靖九年正月庚子〔六九四〕、嘉靖二五年正月丙戌〔七一五〕）・連合協力（実録・嘉靖七年十二月庚寅〔六八三〕）等々、がそれである。

一体にこの時期アフマド、マンスールの時代は、カルムイックに対して優位を保った（TR. 121, Beveridge, op. cit., p. 23にアフマドのあだ名をカルマークの討伐と結びつけて説明している）如くであるが、基本的には、「土魯番屡年犯邊、蓋恃瓦剌外援」（実録・嘉靖九年正月庚子〔六九四〕）の様に連合の対象であったとみてよい。

(27) 明史料に土魯番の三大頭目の一人とする曲先出身の回回、牙木蘭は、嘉靖七年に明に投降している。戦死と投降の相違はあるが、彼牙木蘭の事跡はジャバール・ベルディのそれに相応する所が多い。

(28) 「北虜」はムスリム史料ではカルマークと伝える。*Материалы по истории казахских ханств XV-XVIII Веков*, Алма-ата, 1969（以降、МИК. と略す）стр. 557, ' В. В. Бартольд, Отчет о командировке в Туркестан（*Сочинения*. том. VIII, москва, 1973）стр. 176

(29) M. Hartmann, *Der Islamische Orient. Berichte und Forschungen*, Bd. I. Berlin, 1905., S. 344, МИК. стр. 411-12,' Бартольд, op. cit., стр. 191.

(30) TR. 129.' Yule & Cordier, op. cit., vol 4, p. 234.

(31) ラシード汗の没年、子供の数には諸史料間に不一致がある。

(32) Бартольд, op. cit., стр. 175

(33) TR. 129 にマンスールの一女がラシードに嫁したとあり、又、シャー・スルターンの娘が同じくラシードの妻であったとも伝えられており（МИК. стр. 412, 557）、二王家間の通婚関係には検討すべき余地がある。

(34) *Материалы по истории киргизов и киргизии*, том. I., Москва, 1973, стр. 191.

(35) Ibid., стр. 193. 後代の史料ではあるが、N. N. Pantusov, *Ta'rikh-i-Eminie*, Kazan, 1905, p. 19

(36) Бартольд. op. cit., стр. 176

(37) Pantusov, op. cit., p. 19

(38) Бартольд, op. cit., стр. 176

(39) Ibid., стр. 176, МИК. стр. 380, 415. 。彼のトゥルファーン占領の時期についてはムスリム史料の混乱があるが（Бартольд, op. cit., стр. 177）、後掲実録の記事が解決の手懸りとなろう。

(40) МИК. стр. 380

(41) 万暦年間、前掲の馬黒麻の後、土魯番王として、実録には速檀馬黒麻阿力卜把都児（万暦三年四月辛巳〔七三四〕、万暦四年四月己巳〔七三五〕）、速檀阿卜納西兒呵黒麻（万暦七年十月丙子〔七三六〕）、哈喇哈失（万暦二十年八月庚寅〔七四一〕）、阿黒麻王（万暦二三年五月乙酉〔七四一～二〕）の名がみえる。いずれも系統は不明で、全く手懸りがない。カザーク等であることも考えられる。

(42) **Бартольд**, op. cit., **стр. 177.**

(43) **МИК. стр. 380**

(44) Ibid., **стр. 380**, **Бартольд**. op. cit., **стр. 177.**

(45) Yule &. Cordier, op. cit., vol. 4, pp. 232-39

(46) アブド・アルラーヒムはラシードと妾の間の子と伝えられている。 **МИК. стр. 412.**

(47) Hartmann, op. cit., S. 296

(48) Ibid., S. 296.

(49) 清実録・順治三年六月壬午の勅。入貢は五月辛酉。